

鈴木時夫先生の御逝去を悼む

浅 野 一 男

鈴木時夫先生は1978年3月10日夜半、心不全のため急逝された。享年67才であった。

先生は1934年台北帝国大学理農学部生物学科を御卒業ののち、ただちに森林植生の調査をはじめられた。先生が群落学に足を踏み入れた1930年初頭はようやく日本の森林植生を体系化しようとする気運が高まった時代であったが、なお資料の蓄積が不十分で実証的研究には幾多の困難があり、全般的には群落学以前の森林帯論にかわり得るまで発達していない時期であった。植物分類学を専攻された先生は、1934年チューリッヒ・モンペリエー学派の方法によって、台湾亜熱帯、暖温帯の森林植生の調査を開始され、1942年大武山中で応召し、復員されるまでの間、研究を中断されたほかは、ほとんど外業に打込まれた。帰国後の1947年以降は日本列島の暖温帯から冷温帯にまで領域を広めて研究された。その成果は「東亜の森林植生」(1952年)に集大成されていることは余りにも有名である。

中欧学派の方法論から出発された先生は、外国の学者の説を鵜呑みにするのではなく、数多くの外業を試みて理解するという方針を貫かれた。そして、Braun-Blanquetの考えを中核にDu Rietzの考えも取入れ、日本の研究者の考え方も十分ふまえた上、外業を通して得た豊富な日本の植生に関する知識と理解、植物分類学に対する深い造詣、早坂一郎教授の下で学んだ地質学の素養などが相まって、植生類型と森林フロアの生態的分化を重視する独自の植物社会学へと次第に昇華していったように見受けられる。

ドイツから帰国された1962年より、高山帯、亜高山帯の植生に研究領域を広げ、日本アルプスをはじめとする中部山岳と北海道の山地に足をのびされた。先生が日本の植生研究に着手された当初の状況は最初に述べたが、そのような状態から出発された先生は暖温帯から高山帯まで、ほとんどの植物社会学を研究され日本の植生の概要を明らかにされた。当時発表された論文も「日本森林植生の最上級単位と領域」(1966)、「日本の自然林の植物社会学体系の概観」(1966)、「日本列島植生の特性と支配的環境要因について」(1972)、Die Ergebnisse der palynologischen Untersuchungen in Japan und die pflanzensoziologische Betrachtung (1962)など、日本を概観する論文が多く含まれている。

先生は教育にも非常に御熱心であった。また植物

社会学を他分野の諸科学からの批判にも堪えられるよう学問の基盤を強固にする努力を続けられた。「生態調査法」の著述、「ブラウーン・ブランケ植物社会学Ⅰ、Ⅱ」と「植物社会学命名規約」の訳出はその活動の一端である。「植物社会学」は清貧な学生が求めやすいようにという配慮から分冊にしたと承っている。私事にわたって恐縮であるが、私が外業で直接先生の御指導をいただいたのは、1965年赤石山脈の高山帯植生についてである。自然界を生態系としてとらえ、生態系を一応生物集団と環境とに分け、その相互作用を解明すべきことを身をもってお教え下さった。一時間程で高山ハイデの一測定を終えたら、「そこから得られるすべての情報を読みとったか」と指摘されて、身のすくむ思いをしたこと、外業が終えても疲れた体をやすめようとせず、暗い灯の下で組成表を組みながら、「調査は必要にして十分でなければならない」とお訓しになった姿を今でもはっきりと思い出す。先生は種の決定にも極めて慎重であった。疑わしい植物は必ず採集されて専門家の下へ送られたが、その際にも必要以上の量を採用することを徹底して戒められた。夜5万分の1の地図をひろげ、その成果にもとづいて、ここにはこういう植物社会が成立しているだろうと実に明解に推論を下される。そうすると地形図の上に実に鮮かに植物社会の分布が浮び上がってくるのがわかった。そして調査が進むにつれてそれが次第に実証されるに及び、ただ驚嘆するばかりであったが、事実の背後の本質を看破する先生の力を知り、少しでもそれに近づきたいものと心に誓った。先生はご多忙の中で私の稚拙な原稿を実に丹念に読んで下さった。和文でも欧文でも文章や用語に明確さを欠いた所は必ず別紙にそれに対する意見を書いて下さった。これはお亡くなりになるまで続いたし、決して私のみに与えられたものではないのである。ただこれが先生の死期を早めたに違いないことを思うと、先生に対してもご遺族に対しても申し訳なく存するのである。

最近の先生の御研究は、現在認められている植物社会学の群集の本質は何かという問題に向けられていた。各論から体系的に日本の植生を描写するといふ、多くの労力と時間を要する仕事を、1969年春病に倒れられた先生は、日本の植生学の先駆者として歩まれた道程の必然から、畢生の仕事として精魂を傾けられたと拝察される。先生は「群集の知見の

発達には認知、特徴づけ、限定の3段階があり、日本ではまだ多くの群集が特徴づけの段階におかれていて、これらを限定の段階に進めることが、今後の群集記述の重要な仕事であって、群集は現実の姿においても、そのもつ意味においても限定されねばならない」とお教え下さった。さらに組成表を理解しやすくするために、混合生育群を表から除くけれども、混合林分についても十分とりあげて論じなければ、日本の植生の全貌を体系的に明示することは

できないとお訓しになった。そして、日本の植生単位の成立分化を植生地理学の立場からも論じる時が到来したようだとお述べになった。これらのことは植生学を志すものの指針となるであろう。

先生の業績は筆紙をもって語りつくせるものではないであろう。しかし、先生の御意志が多くの研究者に引き継がれることは確かである。先生の突然の御逝去を悼み、謹んで御冥福をお祈りする次第である。

鈴木時夫先生の思い出

大 木 正 夫

私が中学5年のとき千葉生物学会に入会したとき研究発表の際に誰れにでも気のつかない点をていねいに指摘され教えていた先生がいた。その後大学に入って林学を専攻して何を研究しようかと考えた。その頃戦争で森林が大量に伐採されて荒れており、早く復旧するにはどうすればよいか、遺伝学的に育種をして早く大きくなる木を作るには私の一生を通してでもできることではない。それならばまず、適地適木を考えなければならない。生態学を研究することがよいと考え、或る日鈴木先生に相談した。先生はそれはよいことであり、いつでも来なさい。東京大学農学部森林植物学教室にいるから、ついでに土曜日と日曜日はだめで、それは農業をしなくてはならないので困るといわれた。

私は手はじめに学校の近くにある多摩丘陵の植生調査をした。貧乏学生であるから土曜日と日曜日はアルバイトをしなければならなかったが、休講の時など山に出かけてはポツポツ調査をした。

多摩丘陵は千葉県などと違ってカシ類が極相になるであろうからカシ類のあるところで調査したら復元植生が明らかになるからと教えられて、カシ類のあるところで調査をしていた。先生に一度山を見ていただきたいと話したら、一度見てあげようといわれ貴重な一日の土曜日をさいて来ていただいた。

私が先生にこの多摩丘陵のシラカシはどうも一列に並んでおり、人間が植えたものでないか、先生もシラカシは植えたものかも知れないといわれた。そのとき百草園（もぐさ）の山頂部にシイの残存林があり、やはり大木君も、多摩丘陵も房総半島と同じようにシイ林になるようだねといわれ、シイのあるところを探して調査をしたらと教えられた。その日の調査を終り、府中市のケヤキ並木の下にあった屋

台のラーメン屋でワントン先生からごちそうになり、生態学の話をしていただいた。先生は当時一つものを聞くと十のことを教えて下さった。

その後尾瀬ヶ原、月山の調査に連れて行かれ、現地で教えていただいた。尾瀬ヶ原の調査のさいに富士山の青木ヶ原の調査をしたらどうかといわれ、卒業論文には青木ヶ原を調査したが、十分調査を終了しないで卒業してしまった。

その頃になると、先生に4つのことを聞いても一つぐらいしか教えて下されなく、あとは君自身で考えなさいといわれた。そのときは非常につらかったがあとで考えてみると、一人立ちするためには自力でやりなさいと教えてくれたことだと思い、よい先生に教えていただいてよかったなあと今でも思っている。

千葉生物学会の例会で銚子の犬吠崎に行ったときである。先生は誰れにでも親切に教えてくれる方でこの草は何か、これはラセイトソウで、海岸近くに生育するもので、潮風の当たるところでは葉が厚くなる。よく注意して観察をするとよい。それから君たちも草や木ばかりでなく、そのうちコケ類や地衣類までも研究するようになり、やがては石を採集するようになりますよと小中学生に話されたことを今でも思い出します。そのとき一番あとからついていった私が、今は土壌や石を採集するようになっている。

先生から何を教えていただいたのであろうか、細いそれぞれの問題ではなく、十分に観察をしなさい。そのことによって道は開けてくることを教えられた。

鈴木先生は今でも私の中にあって、いつでも手をとって足をとって教えて下さっている気がしてならない。私は、よい先生をもって幸せであると思っています。